

話し合い

日本語教育の現場

西川 ありがとうございました。それでは続きまして話し合いの方に移っていきたいと思います。今から 60 分ほど話し合いの時間があるかと思いますが、前半は今出てきました日本語教育の現場の問題を更にいろいろな観点から出していただきまして、問題を共有するという形で進めていきたいと思います。後半は先ほど上野さんからご指摘をいただきましたけれども、日本語教育、国語教育を含めた言語教育という観点から日本語教育から国語教育へ何か伝えること、あるいは国語教育の方から日本語教育に伝えることというような形で言語能力、言語教育全般について話し合いを進めていきたいというふうに思います。前半の話し合いを私の方で司会をさせていただきます。

まず、最初に今 4 人の方にお話をさせていただきましたけれども、それぞれのお話について質問なりコメントがあるのではないかと思います。それを一つ出していただきながら、問題点を絞り込んで話し合いを深めていきたいと思います。いかがでしょうか。

スコギンズさんの方は外国語として日本語を学んでいる場合もあれば、第二言語となっていくような形で日本語を勉強している人もいるということです。今泉さんの方は中国帰国生徒ということで、だいたい第二言語として発達し続けていく、あるいはそれが母語になっていくということだと思いますが、高校生対象ということでした。現場の先生方にコメント等を簡単にいただければと思います。

来日時期と言語の習得

花島 本校では、今泉さんの発表でもありましたように、中国帰国児童も多数在籍しております。その子どもたちが多くなったことから、特設学級を作りまして、そこで日本語の学習や教科学習の支援を、取り出し指導の形で行なっております。先ほどの、今泉さんのお話の中で、3～4年生の時期、つまり、臨界期に帰ってきた子どもに非常に問題が生じがちではないかということがありました。確かにデリケートな時期で、うまくいけば良いのですが、うまくいかなかった場合にはゆくゆく問題を抱えたまま、成長していく形になるのではないかと思います。ただその時期に帰国、来日したのでは、学力に結びつく読解能力が育たないということは決してないと思うのです。今まで私が教えた中でも、それぞれに進学をして自己実現を図っている子どもは沢山ありますから、その時期に帰ってくるのが良くないということは一概に言うことは難しいと思います。そういった状況を不幸ではなくするための方策、教え方ですとか授業の持っていく方があると思い、今まで模索しながら実践を積んでまいりました。それを踏まえて、その子の特質に合わせた学習方法を選択し、支援していけば3～4年生に帰って来ても大丈夫、決してハンディにならないと思っております。

ちょうど小学校期の子どもというのは劇的なほどに知的な発達をしていく段階であります。この時点で数々の周囲の環境が変わるといのは本当に負担が大きいです。特に言語環境の変化は大きな負担になるのではないかと思います。小学校期の子どもで自ら望んで日本に来る子

はおりません。みんな、いろいろな事情や背景を持って来日してまいります。彼らの戸惑いや複雑な思いを、どうやって日本語を学習していく意欲に結びつけていくか。それを担っているのが我々教師であったり、地域であったり、保護者である周囲の者でないかと思うのです。そのために、子どもが主体的な学習活動ができ、進んでみんなと勉強できて、それが楽しいと感じられるためには、どういう具体的な方法がいいか、ということ日々考えております。確かにその知的な発達というのは言語が根幹になっていく部分が非常に大きいと思います。ことばを手掛かりにしてより沢山の他のことばを身につけ、人格などをも形成していくということだと思います。言語の形成がまだまだ終わらないときに、言語環境が変化する場合どうしたらいいか、難しい問題であると思います。母語を保障するということもあります。必要性は十分感じておりますが、それは現在の体制では非常に難しい。子どもを目の前にして、今自分で支援できることは、やはり日本語をしっかり教えることしかないのかと自問自答しながらやっております。もちろん彼らのアイデンティティーも重要です。日本語指導は彼らの今までの文化を否定することではありません。日本語ができないのではなくて、他のことばができる。ハンディがあるのではなくて、チャレンジしているのだということ周りの子どもによく分かるように指導するのが大切です。

適応のための環境作り

日本はなかなか習慣や民族性などの異なったものが受け入れられないところがあるようです。帰国あるいは来日した子どもたちの適応だけではなくて、受け入れる子どもたちや私たちの努力や変容が、彼らの適応にも大きく影響すると考えております。いかにしたら彼らが日本語をスムーズに習得できるか、いかにしたら学習を保障できるか、方策はいろいろあると思います。その中でも重要なことは、学校に来るのが楽しいと感じさせる環境、学習するのが必要だと思ふ学習の場の設定、学習活動の工夫ですとか教材の作成、また児童の実態の把握です。それによって授業の中で活躍の場を持つことができ、楽しく学校生活が送れ、日本の生活に対する姿勢が前向きになると思います。そして、今まで持っていた文化は決して恥じるものではなく、他の人が持っていないものを自分は持っているんだと誇れるような環境を培っていきたいと思っております。

西川 ありがとうございます。なかなか問題が広いので、もしよろしければ少し絞ってお話しいただいてもよろしいかと思ひます。

生徒自身が持っている力をアピールする

秋吉 日本語が話せないというだけであたかも知的能力まで低いように見られがちだということがやはり学校の中では大きな問題になっていると思ひます。やはりトツトツとした日本語を聞いていますと、どうしても何かかばってあげなくてはいけないというような気持ちになると思ひます。また、大人同士でも、ある分野の第一線で活躍されている外国人の方と話す場合なども日本語があまり流暢でない方ですと、その方の知的レベルまでがそのしゃべり方相当だと錯覚してしまうことがあり、その方が母語で話すのを聞いてはっとしたりします。生徒の場合にも、その生徒自身が持っている能力ですとか、普通の一般の日本人生徒が持っていない良い面を、学校生活の中で一般の生徒にアピールしていくことが大切だと思ひます。そういう中で外国人の生徒がそれぞれ自分のいき場所を見つけていくことができるのではないかと、思ひます。

クラス形態・教える内容の難しさ

私どものところでは「おはよう」「こんにちは」ぐらいしか日本語が分からない生徒も入ってきます。一般の授業を受けさせるのは無理なので取り出し授業をしておりますが、先ほどスコギンズさんのお話の中に、ある一定期間だけ集中的に生徒に日本語を教えてその後は普通の授業に出させているというのがありました。その辺をもうちょっと詳しく伺いたいと思いながら聞いておりました。その場合のクラスの人数というのはどのくらいなのか、それからESLの担当の先生がついてどういう補助を実際になさっているのか、そういうことも伺いたいと思って大変興味を持ちました。私どももどういうクラス形態がよいのかを模索中です。ずっと取り出したままでいますと、その授業の到達目標というものがとかく低く設定されがちであるということ、それからことばを易しくかみ砕いたり、話題のレベルまで下げてしまうことがあるのではないかと、この危惧がありまして、あくまでも知的レベルは下げないということが目標としてありますので、どのように生の教材、あるいは高校生の時点で考えるべき、関心を持ってもらうべき話題を授業の中で取り込んでいくかということが大きな問題になってきています。

例えば国語の教材などでも、今、3年生の現代文の授業ですとこの時期はだいたい「舞姫」をどのクラスでも行っているわけです。それで今年の一つの試みとして、入学時にはほとんど全く日本語がわからなかった外国人生徒を、3年の現代文の授業なのですが、一般の生徒と同じクラスで学ばせています。国語の教材で何を求めていくかという点が問題となるわけですが、日本語の表現を読み味わうということだけに徹底していきますと、どうしても外国人子弟や帰国子女はつまづくことが多いのですが、思ったことをどんどん発表するようなことが目標になるのであれば、例えば全部翻訳を読んで、内容を理解した上で、授業の中で自分の感想なり何なりを発表するという形で参加していくことができるのではないかと。そういうような試みをしているのですが、やはり、それもレベルの差があまり大きすぎますと、そこまでとても到達しない。途中で生徒の方が、「もうこんな難しいのは読めない」と自分であきらめてしまうということが生じたりなかなか難しいものだと感じました。

また、古典の授業でも、私が受け持っているクラスで在日の三世が沢山いるクラスがありますが、彼らは普通の話したことばは全く問題なく話せるのですが、とかく文法ですとか、口語訳をしなさいというと、もうとてもついていけないと、そこで興味、関心を失ってしまうようなところがあります。ですから、古典の教材で一体私たちは何を教えていくのか、ということ、口語訳や文法以外に何をまず教えなければいけないのかを考える必要があるのではないかと日々思っています。

西川 ありがとうございます。今お二方に現場の報告をお願いしましたが、含めてご質問、あるいはもう少し詳しく聞いてみたいということがございましたら、どうぞ。

第一言語と第二言語の関係(質問)

氏原 2点質問させてください。一点目は今泉さんのご発言に「これに対して、日本での生活経験が2、3年と大変短くても、第一言語である中国語がしっかりしているために、日常会話は多少ごちないが思考力を要する教科は順調な者もいる。『古典』と『中国語』の相関度は非常に高く、『数学』や『英語』との相関度も高い。」とありましたが、これは、結局その人間にとっ

ての第一言語が決まってしまった後の第二言語の習得というのは、第一言語の能力を媒介にしながら習得していくという要素が非常に強いということだと私は受け止めました。この部分は、私にとっては内容的に非常に魅力のある部分で、第一言語である中国語がしっかり身に付いている者は、そういう思考力を要する教科が順調な者もいるという、先生のご経験を踏まえたご指摘だと思うのですが、かなりこういったようなことが一般的に言えるのかどうか。この問題は国語教育の立場から考えると、国語がしっかりと身に付いている場合には第二言語の習得、つまり、一般的には今の学校教育の中では中学校から英語教育が行われるわけですから、そういったときに国語の能力が高い方が英語を習得しやすいということが一般的に言われますけれども、それが中国語と日本語の場合などもこういったことがかなり言えるのかどうか、これがまず一点目です。

臨界期に来日した児童の言語習得(質問)

それから2点目は今花島さんの方から「小学校3～4年生の時に帰ってきて大丈夫なのだ」と、つまり、そういうような今までの積み上げがあって、そういったところに注意しながらやればその辺は決して混乱しないのだ、というようなお話だったと思うのですが、その時の混乱しないということの中身は何なのか。つまり、小学校3～4年生というのは先ほどからいろいろな先生方のお話にあったように言語の臨界期で、非常にデリケートな時期です。つまりそこである程度第一言語が決まっていくことを考えると、先ほどの花島さんのお話の中で大丈夫だというのは日本語を第一言語に、というような意味だったように受け取れたのですが、その辺はどうなのか。つまり、混乱しないためには二つの道しかないわけですね。ある意味でバイリンガルになるか、あるいは第一言語を塗り変えてしまうかです。塗り変えてしまうというのは元々持っていた母語をその時期に日本に来たために、日本語を第一言語にしてしまうということです。そうなれば確かに混乱はないですね。ただ、その後の問題が別に出てくるわけですが、そうすると、小学校3～4年生で帰ってきて大丈夫だということの中身は、つまりバイリンガルとしてある程度日本語も彼らの中で母語と共存可能だからということなのか、あるいはその子が例えばブラジルから来たとして、その子の第一言語として持っていたポルトガル語を日本語に塗り変えさせてしまうために大丈夫だということなのか。子どもたちの実態がどうなのかということと、同時に、指導していく場合にこの辺りのことはどのようにお考えになっていたのか。これは実際には非常に難しい問題です。国際化というような社会の変化が進展してきた中で初めて起こってきた問題です。大丈夫だとおっしゃった中身というのはどういうことなのか、ということをお聞きしたいと思います。

第一言語の習得後の学力

今泉 氏原さんのご質問は痛いところを突かれたという感じですが、自分が担当している数少ない例から判断すると、第一言語の中国語がしっかりしている生徒は、思考力を要する教科や第二言語の習得にも基本的に問題がない、60%大丈夫だという感じがいたします。中国で中学校・高校レベルぐらいまで、特に高校へ行っていた子というのは学力の上ではほとんど問題ないという感じがいたします。それは先ほど上野さんがおっしゃったような方向においても裏付けがあるのではないかと、という気がいたします。

花島さんがおっしゃった件については私もある意味で同感です。子どもは小学校3～4年生ぐらいで帰って来た子どもに、何とか学校を楽しい場にしてやりたいと思いますし、そうするのが私たちの仕事だと思います。しかし、きついなというのが率直な感想であります。

日本の学校への入学時期

花島 非常に難しい問題だと思います。私の教えた子どもはもう既に高校生になっております。一度ゆっくりと会って、彼らが来たばかりの時どう思い、どう感じていたのか。今ではどう思っているのかをよく聞いて、日ごろの指導にフィードバックしたいと思うのです。私自身も彼らの頭の中で、第一言語・第二言語などことばの認識がどうなされているのか、できるものならば中を見てみたいと思います。

私の申し上げたうまくいっている例は氏原さんの言われるある意味でのバイリンガルであると思います。バイリンガルにもいろいろな段階があるとよく言われます。4年生で本校に編入学し、自分の目指す高校に進学した子と最近よく話す機会があるのですが、その子は家庭では中国語で会話をしています。しかし、学習言語は完全に日本語で運用しております。生まれてからの環境で中国語を生活言語として身につけ、学習言語を形成している途中で新しい日本語の世界に飛び込み、現在日本語を学習言語として自在に使っている。この子が日本語をどういう過程で習得し、認識していったのかを客観的にまた、本人の意識の上ではどう認識されていったのか調べてみたいと思います。第一言語でお父さん、お母さんと何不自由なく話ができる。これは生活のことばですが、彼は進学についてお父さん、お母さんと話をしているわけです。自分が将来こういうふうに過ごしたい、こうなりたいがゆえにこういう学校へ行きたい、という話はある程度、生活言語を超えたところ、自分の将来の希望像や抽象的な概念を訴えなければならないわけです。この辺はどこまで克服しているのか。非常に疑問と興味とを感じております。

また、もっと幼少時に来日した場合には、第一言語が入れ替わってしまうことがあると聞きます。中国語で話しかけても全然分からない子どもや、お父さん、お母さんの話すことは聞いて分かるのですが、自分が話すことになるとうまくできず、日本語で言った方が言いやすいという子どもです。しかし、年少期や小学校3～5年生ぐらいのデリケートな時期での来日でも、第一言語が全く塗り変わってしまうことは逆に少なかったと経験しております。ただ、家庭内での会話は来日後も一貫して第一言語の中国語で話されてきました。それらの子どもたちに、私自身が今まで支援してきたこととして、お父さん、お母さんになるべく家庭で子どもに話しかけてほしいとお願いしてきたことがあります。仕事でお忙しいのは十分承知の上で、子どもとよく話してほしい、話しかけてほしいと言ってきました。中国語を聞き話すことは、親子関係を円滑にするとともにことばの保持に大きくつながります。ことばの保持は彼らのアイデンティティ - を大切にすることにもつながると考えてきました。うまく保持できている家庭が沢山あります。日本語は学習言語として身につけることができるよう学校において支援することができます。しかし来日するまで使われていたことばを保障することは、現在の私の体制では十分にできない。そのための苦肉の策です。

そして他に聞く話では、多言語の国家へ行きますと、家庭の外と内とで別の言語を使い分けることもあまり珍しくはないようです。例えば香港では家庭で広東語を使っていて、学校では英語で学習している。どちらも中途半端かということそんなことはない。もちろん状況や環境には様々

な違いがあるとは思いますが。かえって一つのことばだけで家も外も全部済ませている状態は世界の大多数ではないのではないかと思います。二つのことばを操ることは決して不可能ではない。ただ、子どもの特性や特質、能力によっては負担が大きい。一つのことばだけで生きている日本人に比べればやはり負担は大きいのではないかと思います。

西川 今ちょうど母語の保持というお話が出ましたので、インドシナ難民の子どもたちのことを研究なさっているA J A L Tの岩見さんにご報告をいただければと思います。

インドシナ難民の母語の保持

岩見 インドシナ難民の子弟の母語と日本語の使用状況の調査をいたしました結果に関連して、発言したいと思います。これはアンケート調査で、個別の調査ではございませんので、非常に大枠の傾向を見る調査結果と受け取っていただきたいと思います。現場で対応した経験から個人差が非常に大きいという前提に立って考えないといけないと思います。カミンズなどの理論や、カナダ、アメリカ、オーストラリアなどの調査がありますけれども、第一言語と第二言語能力の発達は来日時の年齢や本国での学習経験、来日後の学校や家庭でのフォロー、手当などいろいろな条件によってかなり違ってくると思います。是非とも日本における外国人定住子弟の現場における調査、第一言語と第二言語の能力の発達と各々の相関関係の研究というものを縦断的に継続して行っていただきたいと思います。

インドシナ難民の母語についてですが、不幸なことに、来日時から母国語の学習については非常に限られた人が多い、ということが全体的に言えると思います。もちろん例外もあるのですが、1979年から日本政府は受け入れましたけれども、学校教育を受けずに長期間海外のキャンプに滞在し、その間ベトナム語の読み書きを多少はやってきていてもいわゆる学校教育という体制にはなっていないという状況を経て来日している子のパーセンテージが非常に高いということが一つあります。来日時から母語ができない、特に読み書きができないという子どもが平成3年度の調査では5割から7割です。話すことは比較的できても、読み書きは学校教育の経験がないということで、かなりの子どもができない。その後来日時と調査時の母語力とを比較してみますと、話す・聞く力の方が急激に落ちていきます。母語の読み書きができていた人についてはこれは子ども自身に聞いた自己評価ですが、読み書き能力においては多少の低下の傾向はありますけれども、その能力の低下が非常に少ないという逆の現象が出ています。母語の読み書き能力を確立していない子どもは日本で学習の継続をしていない状況で低下が早いと言えると思います。

カミンズの理論などでも第一言語である程度思考、概念能力を身につけていれば次の学習言語の習得も早いということですが、これは来日時の年齢がいろいろありますので、日本生まれの子どもも多いわけですが、個別の事例に当たって母語力と日本語力の客観的な完璧な能力テストというのはしていませんので、そこまで言えませんけれど、面接などをしてみますと、やはり本国での学習経験ですとか、そういうことがかなり日本での学習の際の習得度にも影響があるのではないかと思います。

西川 それでは、関口さんお願いいたします。

インドシナ難民の日本定住後の日本語に関する実態調査

関口 ただいまの平成3年度に行いました「インドシナ難民の母語の保持と喪失」という調査の後に「日本定住インドシナ難民の日本語に関する調査研究」という調査を行ないました。これはセンターで日本語学習を修了した後、日本に定住しているインドシナ難民に対して、定住後の日本語に関する実態をセンタ-の日本語教師が訪問調査で行ったものでございます。調査は成人と子どもを含めて425人に行いました。本日は子どもに限ってお話いたしますと、調査対象は、現在小学校・中学校に在学している子どもに限りませんでしたので、非常に限定されております。

つまり、センタ-で年少クラスに入っていたとしても、10年、15年経ちますともう今は成人ですから成人の調査対象に入ることになります。センタ-で年少クラスで学習し、かつ現在も小中学校に在学している子どもたちのみを「児童・生徒に対する調査の結果と分析」の調査対象としました。これはまだ、現在印刷段階に入っておりまして、9月末には出ると思います。今現在学校においてその子どもたちが日本語に関してどのような問題を抱えているのか、どのような日本語に困っているか、教科学習理解との関連、教師、友達間はどうか等の調査をしたわけです。調査結果は大まかに言いまして今までのお話に出ていましたこととほぼ一致しております。

確かに学校の中での日本語、先生の話、あるいは友達との話はよく分かる。楽しく学校生活を送っているという子どもたちが大半でした。しかし、今回の調査対象は教師側から連絡が取れて訪問した子どもたち、というふうに限定されていますので、このような結果が出たのかもしれない。但し、教科に関しましては数字としては半数の子どもが分からないという結果になっています。今回調査対象となった子どもたちは、日本に来てからだいたい7年以内ということになります。その子どもたちの半数以上が教科に関しては分からないということです。ではそれをどういふふうに解決しているかということになるわけですが、日本人の子どものように、塾などに行っている子どもは当然ながら非常に少なく、なかなか学校以外で学習のケアをしてもらえないのが現状であるということが分かりました。

外国人の子どもの能力の把握

それで、インドシナの子どもたちに対して4ヶ月の日本語指導をして、日本の小・中学校に送り出している立場としまして何点か申しあげたいことがございます。

まず一点ですが、外国人の子どもが日本語が分からなくてできないのか、教科が分からなくてできないのかということが、学校現場で把握されていない場合が多いということです。具体例を申し上げます。インドシナ難民の子どもがとてもやさしくて私に電話をかけてきました。「先生、私3+4、7+8は分かります。大変やさしいです。ベトナムで勉強しました。でも、田中先生に3枚宿題をもらいました。」私は、なぜそのような宿題をもらったのかをいろいろ聞いたところ、「~+~は」とぱっと聞かれたとき、答えられなかった。次に同じスピードでまた、別の数字で聞かれた。しかし、突然のことと緊張で先生の声聞き取れなかった。担任の先生は「この子は一桁の足し算も分からない、大変だ、追いつかせなくては。」ということで宿題に出したというわけです。このケ-スは例えば「はちたすきゅうは」という日本語の聞き取りができなかったということで、その計算方法が分からない、つまり、教科が分からないのではないのです。外国人の子どもが今教室で分からないのは日本語理解の点なのか、教科学習の部分なのか、その

両方なのかということを確認するものが必要だと考えています。

母語話者として持っている学年ごと、年齢ごとの語彙や、教科として必要な学年ごとの語彙というものは出ているわけですから、それに対して外国人の子どもがどの程度把握しているかということテスト形式で判別できるものがぜひ欲しい、ぜひ必要だと思っているわけです。どの先生でもそのテストをしたらだいたい把握できるというようなものを作成する必要があると思います。

国語の授業への要望

それから今日の午前中から午後にかけて大変参考になるお話を沢山伺いました。午前中に氏原さんが国語科のアイデンティティ - というお話をなさいましたけれども、そのことにつきまして2点目として申し上げたいと思います。

国語科の指導要領の中で想定学習者として考えられていなかった外国人子弟が登場し、それが日本の教育形態の中で確実に学習しているという現状を踏まえまして、国語科のこれからのアイデンティティ - を新たに考えていく必要があるのではないのでしょうか。もちろん先ほど高校の今泉さんが文化の問題などいろいろな母語話者の問題をおっしゃいましたように、今までのものをなくした方がよいというのではなく、今までのものにプラスして日本語の新しい切り口を考えていけたらと私は考えます。

母語話者としての日本人は気がついたときには自然に日本語を話しているわけですから、どうしてもこの時に「が」を使って、「は」を使わないのかという種類の学習はしていないわけです。

このような学習は恐らく日本人の子どもにとっても非常に興味を持つものではないかと思えます。それで国語科の中にぜひこのような日本語の形態、成り立ちというものを入れて欲しいと思います。今までの国語文法は頭の中に沢山入っている日本語を整理、分類する形の文法であったけれども、何も無いところから形作っていく文法、というものを国語科の中に入れていただくと、日本人の子どもたちには非常に新鮮な驚きがあると思います。また、外国人の子どもたちにとっては、教室で一緒に学習する形がとれるという意味では、取り出し教育のいろいろな矛盾(例えば、取り出し授業を受けられること自体はとて素晴らしいことではあるが、その間の通常の授業はますます遅れてしまうという現場の悩み等)が少しは改善されるのではないかと思うわけです。

各教科における日常語

それから3点目ですが、各教科に出てきます日常語の現状について申し上げたいと思います。教科ごとの専門用語に関しましては教科のことばとして教えることができますが、一般の日常語の表現は同じことでもいろいろな言い方が出てきているのが現状です。これを各教科、学年ごとにある程度統一していただくと、外国人の子どもたちにとっての負担が非常に軽くなると思います。また、低学年の場合には語彙表現の広がりをもっと狭くしていただくと楽になるのではないかと思います。以上でございます。

西川 ありがとうございます。非常にこの会の目的にふさわしいご意見をいただいたかと思えます。今ご指摘いただいた中で「分からないのは何か」ということが非常に大きな問題になると思いますが、その辺り、教科書の検討をしていらっしゃる横浜国立大学の工藤さんに少し

お話していただけたらと思いますがよろしいでしょうか。

教科書の日本語の難しさ

工藤 今の問題についてお話をさせていただきます。日本語教員養成はだいたい文学部や外国語学部に設けられているのが大変多いのですけれども、横浜国立大学の教育学部では、全国でも非常に数が少ないのですが教員養成系に日本語教員養成ができております。国語教員とか英語教員とか養護教員とか社会科教員という形で教科教育の方も勉強し、かつ、副専攻として外国人児童生徒に対する日本語教育もできるというような教員を送り出してきています。10年ぐらい経ちまして、現場で外国人児童生徒が大変増えたということであるいろいろな形で活用していただける機会が増えてきております。そういう卒業生たちの声を聞いておりましたときに一つ考えさせられましたのが、今出てきました評価が分からないという点です。つまり日本語を外国語あるいは第二言語として学んでいく子どもたちというのはどういうものであるか、がわかっていらない先生が大変多うございますので、だいたい算数とかそういうものできないと、この子は知能が低いと決め付けられてしまう。先ほど関口さんのお話でもございましたが、そういうことがよくある。ところが、大学で副専攻とはいえ、日本語教育を勉強しておりますと、算数の概念が分からないのではなくて、日本語が難しい、日本語が分からないのであると。そして、その一つの大きな原因が教科書の日本語がとても難しいと思う、ということをおっしゃっています。

そういうこともありまして、大学院の授業の中に「日本語教育総合研究」という授業があるものですから、卒業生と大学院生たちが、社会科などは最初から非常に難しいというのが分かっておりますので、今は算数の教科書の日本語の考察をしております。先ほど語彙が難しいというお話が沢山出ていたと思うのですが、横浜国立大学の方で考えておりますのは、語彙もさることながら、非常に構文が難しい。複文といいますか、ワンセンテンスの中に3つも4つも出来事をつめこんでしまうために、最後はどこが主語でどこが述語だか分からなくなるということが起きる、というようなことを今考えております。例えば小学校5年生の小数の掛け算の文章題に、こういうのがあります。「1メートルの値段が200円のリボンを1.5メートル買うと、代金は何円になるでしょう。」これは日本語教育の立場で言うととても難しい日本語です。日本語でつまづいてしまうという状況を生み出さないためにはどうしたらいいかということで、一つ案を考えたのがこういう書き換え文例です。「リボンを買いに行きました。リボンは1メートル200円です。このリボンを1.5メートル買います。値段はいくらですか。」ワンセンテンスで言っているところを4つの単純なセンテンスに分解して文の複雑さを解消します。そのことによって、その子が本来持っている算数を理解できる能力が発揮できるようにする必要があるというようなことを考えております。こういうわけで、教科書の日本語をより明確なものにしていくことも含めて考えていく必要があるのではないかと思います。

西川 ありがとうございます。先ほど野村さんの方から手が挙がってございましたけれども、

臨界期に帰って来た子どもは学問的に保障されるか

野村 さっき私が持っていた疑問は氏原さんとまったく同じことだったのです。つまり、先に今泉さんと上野さんの話を聞いていると、臨界期に日本に来た子どもについてはかなり絶望的な感じがしたのですが、小学校の先生からそうでもないのだという話もあったものですから、その点について学問的には、大丈夫な場合もあるのだというような理論もあるのかどうかを、上野さんに確認したかったのです。

小学校3・4年生の担任はベテランの先生を

二谷 上野さんの「9歳の壁」というのは障害者の方から出てきているわけですが、実は私は学校現場をぐるぐる歩いておりまして、一番気になった問題なのです。なぜかといいますと、小学校は1・2年、3・4年、5・6年というように担任が変わるシステムを持っている学校が非常に多い。ところが小学校1・2年は結構ベテランが持つ。5・6年生も実は知識のことがありますのでベテランが持つ。そうすると3・4年生というのは実は新任の先生方が持つ学校が非常に多い。ところがことばの問題でいいますと、3・4年生が一番大事な時期なのです。一次ことば、生活ことばから二次ことば、学校ことばへわたる時期が9歳の壁だからです。これが実は国語教育・言語教育の面でいうと現場ではマイナスになっている。やはり、3・4年生の担任はベテランが持つ方がいい。

動機づけの大切さ

上野 先ほどからも個人差が大きいということが言われておりますし、やはり言語を学ぼうという動機づけというのが大変大きいわけです。ですから特に第二言語の場合には動機づけが強くなればそれだけよく回転していくわけです。その動機づけを最も強くするのが同世代の仲間なわけです。ですからバイリンガルがうまくできるのはマイノリティ - ではないということです。ですけれども日本における第二言語話者というのは母語が大抵マイノリティ - なわけです。ですから例えば家族が非常に教育に熱心で、先ほども花島さんがおっしゃいましたように、ご家族が話しかけを母語で非常になされば会話も母語で保持できる。そういう心がけがある場合と、親が教育を受けたことがないというような家庭の場合とではずいぶん違うと思うのです。ですから学校における仲間、あるいは楽しいというそういう環境による動機づけがあれば、言語習得は非常にうまくいくと思うのです。それがなければ言語習得は一般的に低くなると思うのです。動機づけというのが大変大事だと思います。ですから動機づけがあって楽しいということになりますと、特に言語形成期の間は逆に言いますと放っておいても音声などは身につけてしまいますからあまり強制しなくてもいい面も出てくるわけです。

ですけれども、往々にして第一言語がフラフラしていて、そこに第二言語の渡りがうまくいかないと、つまり、渡りがうまくいけば私は年齢が低い場合もうまくいくと思うのです。しかし、言語中枢の臨界期というのはどの言語にもあって、それが第二言語習得だけではなくて、インプットが非常に限られる障害者の場合にも歴然としているということは、そういう習得そのものに受け皿の問題があるということだと思います。

母語保持の条件

野村 一点だけ確認しますと、やはり家庭における母語の話しかけなどが継続しているというのが、母語保持の条件なのでしょうか。

上野 母語の保持ということは、その後の人格形成に大変重要なわけです。しかし一般に年齢が低ければ低いほど、ですから小学校の1年生と4年生を比べますと、1年生の方が手当てがなければ第二言語に移行する度は非常に高いわけです。それで母語を忘れてしまうケ-スが高いわけです。ですけれども、もし家庭でその母語の保持に非常に努力すれば、家庭の生活言語、その年齢の生活言語は保持されると思います。但し、その家庭の言語の中で、例えば大人の言語に至るまで習得を続けるということは大変難しいことだと思います。これは日本にいる第二言語学習者だけでなく、一般に移民の多い地域の言語習得を見てもその傾向はあると思います。ですから、家庭あるいはそういった学校に通わせるとか、そういうことをしないと母語の保持というのはマイノリティ-の場合には非常に難しいと思います。

西川 いろいろと興味深い問題が出てきて、もう少し時間があるとよろしいかと思うのですが、時間も迫っておりますので、この辺りでまとめに入りたいと思います。まず、中野さんの方から諸外国での日本語教育等を含めた観点から今日の話し合いに関しまして簡単にご意見あるいは感想をお聞かせいただきたいと思います。

言語文化習得の普遍的なプロセス

中野 いろいろ先生方のお話を聞いておりましたことなのですが、私たちは海外の子どもたちの日本語教育を支援しているのですが、その時にこれは言語だけの問題ではない、結局文化の問題が非常に重いということを今強く感じています。つまり、日本語を習得する上でやはり文化の存在を忘れることはできないということです。たぶん先ほどからあります、人間のいわゆる言語習得の普遍的なプロセスのようなものが、おおまかでも何かあるような気がするのですが、それと同時に文化の習得のプロセスもありそうだと。そういう普遍的なプロセスをきちんと、ある程度押さえておかないと、どの子どもに対してもいろいろ大変な状況が出てくるわけですが、対応できないのではないかと。その文化とか言語以外のいわゆる思考力とか状況判断ですとか論理性とか、いわゆる一般的に学力と言われているような、あるいは人間の資質的な能力も結局は同じような過程をたどっているいろいろなプロセスがあるのだらうと思うのです。ですからことばを獲得するということは表面的には運用していくわけですが、実はそれを支えているものが、狭い意味での言語能力であり、また文化の問題もあるし、そして学力一般の問題が全部含まれて実は支えられている。それが海外の子どもたちが日本語を習得する場合にはどういう条件下にあるか、あるいは日本の在日外国人のお子さんの場合にはどういうところが抜けてどういうところが問題なのか、というふうに結局個別的にたぶんいろいろと押さえないといけないポイントが変わってくるのではないかと考えております。

先ほどバイリンガルのお話も出ましたが、例えば英語とフランス語のバイリンガルと英語と日本語のバイリンガルというのは私はあまり同じようには考えられない。というのはやはり文化の存在があるからなのです。ですから違う文化圏にまたがった言語の場合にはもっと大変な問題を抱えることになるのではないかとこのように思います。それが一点。

日本の言語政策

それからもう一つが午前中の問題とも関わるのですけれども、結局今まで申し上げたことは一人の子どもにとってどういう教育が望ましいか、という視点だと思うのですが、もう一つは今後私たち日本の立場から言語教育あるいは言語生活をどうしたらいいかという、あるいはどういふふうにもっていきたいのかということがはっきりしていないと、個々に対応できないのではないかと思ったのです。それは具体的に言いますと、例えば中国帰国子弟の問題もそうなのですが、日本を開かれた多文化社会あるいは多言語社会にもっていきたいのか、それともやはり個別文化的というか単一文化的、本当は単一ではないと思うのですが、相対的に単一の社会を維持したいのか、これをいいチャンスとして日本をもっと開けたものにするか、その辺が定まっていなくてグラグラしてしまうのではないかと。

午前中の話で言えば、日本の子どもたちをどういう言語能力の備わった子どもに育てたいのか、ということではいわゆる言語能力を考えた場合でも語彙とか文章能力とかあるのでしょうけれども、それ以外に何かメッセージしたいものがまずあることとか、それを論理立てて思考できるのかとか、そういう表面的でないものもかなり日本語の発信能力ということになりますと大きな問題になってきます。やはりその辺も、どういう言語能力、どこまでを言語能力と捉えるかというような問題も含めて考えていくべきです。実はこれが結局は国語力がないと英語で発信しようとしてもなかなかできないとか、結局全部絡まってきて、その認識の中で私たちは海外で日本語の勉強をしている子どもたちの問題と、国内の子どもたちの外国語教育、そして国語教育が全部つながっているという結論に到達しまして、今何とかそれを同時に進めて連携させようと思っております。

西川 それでは日本の国としての今後の言語政策についてのお話が出ましたので、最後に文部省の佐藤さんの方からコメントをいただきたいと思います。